

ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	東京外国語学校訓導中川元--先輩・同僚・友人・教え子 とのかかわりから見た
Author(s)	中川. 浩一
Citation	茨城大学教育学部紀要. 人文・社会科学・芸術(37): 9-20
Issue Date	1988-03
URL	http://hdl.handle.net/10109/11135
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

東京外国語学校訓導 中川 元

——先輩・同僚・友人・教え子とのかかわりから見た——

中 川 浩 一

明治七年六月二十二日、前月に司法省明法寮在籍の生徒を依願退籍した中川元（なかがわ・はじめ、一八五二〜一九一三）は、文部省十一等出仕を命じられ、外国語学校出勤を申付けられた。職務分掌は舎長と辞令に書かれており、寄宿生徒の補導監督が職務であったと思われる。

舎長としての在職は半年たらず、十一月には五等教諭となった。明治三年十一月、飯田藩貢進生として大学南校に入学のうえフランス学修得を命じられて以来、南校、司法省明法寮と学籍を変えながらも、お雇いフランス人教師から「口頭教授法」にもとづく語学教育を受けてきた事情を考えると、フランス語担当の教員になり得たのは、本人にとって幸いとみるべきだろう。

翌年六月、東京外国語学校四等教諭となり、さらに明治十年八月には、東京外国語学校訓導となった。「訓導」の職名は、一般的には、旧制小学校の正規の教員（『広辞苑』・第三版）を意味するが、明治十年代の時点では、専門学校の正規教員に対する職名として用いられており、「教諭」の改称であった。同様の呼称変更は、東京師範学校でもなされている。¹⁾

明治十一（一八七八）年一月、中川元は文部四等属となり、同時に「師範制度取調の為、仏蘭西に派遣」を命じられた。この時点で文部

省官吏としての役割は、教育職から事務職に転じたわけである。

東京外国語学校在籍の正規教員として中川元が果たした職務を考察するに先だって、東京外国語学校の成立事情を、簡単に考察しておこう。

東京外国語学校は、明治五（一八七二）年布達の「学制」にもとづき、第一学区第一番中学となった南校を、翌六年四月に開成学校と改称し、在籍生徒を専門学生徒、語学生徒に区別した時点をもって、実質的には発足する。

「学制」には、第百九十七章²⁾として外国語学校の規定があり、外国語学ニ達スルヲ目的トスルモノニシテ専門学校ニ入ルモノ或ハ通弁学ヲ学ハント欲スルモノ此校ニ入り研究スベシ」と記される。そうして明治六年八月、開成学校は専門学生徒のみを收容し、語学生徒は新設の東京外国語学校に移籍する制度改革を行った。³⁾

東京外国語学校は、上等、下等各四級を設け、一級は六か月、修業年限四年の原則を定めたが、専門学校に入る者は下等修了で転学できるが、通弁学修業者は、下等を了えて上等へ進むように規定した。

明治七年十二月、東京外国語学校の英語科は独立して東京英語学校

となり、以後、東京外国語学校は、仏、独、露、清の四語学を教授する場となるのである。東京英語学校は、明治十（一八七七）年四月に東京大学予備門と改称、東京大学の管理下に置かれている。

右の事情を勘案すると、中川元が東京外国語学校舎長となった時点では、英語科、仏語科、独語科、魯（露）語科、清（中国）語科に属する生徒が在籍していたわけである。明治七年二月、語学修業の課程を改訂し、上等、下等を各六級、計六年で修業と改めている。入学資格は小学教科卒業であったが、当時、小学校も上等、下等の各八級、修業八年を原則とした。それゆえ、東京外国語学校の生徒は、十代後半の青少年を主体に構成していたとみられてられる。

開成学校から独立するに当たって、東京外国語学校は開成学校の旧校舎を継承している。明治八年八月三十日、寄宿舎新築竣工し、翌日付で英語学校に在る旧寄宿舎から生徒を移転させたと、『東京外国語学校沿革』（一九三二年）には記される。それゆえ、中川元が舎長を勤めたおりの寄宿舎建物は、旧開成学校当時からのものであったろう。

2

中川元が東京外国語学校に舎長として採用された当時の学校長は、辻新次であった。そのことは、たまたまそうであったと解すべきではないように思考するが、その論拠を次に記してみよう。

すでに記したように、中川元は信濃国に属する飯田の出身で、廃藩置県後の行政区画では、筑摩県の管轄に位置づけられる。これに対して辻新次（一八四二〜一九一五）は、信濃国松本藩士であった。藩校崇教館で学んだ後、文久元年（一八六一）年に江戸へでて、蕃書調所を経て、開成所化学教授手伝となり、仏学（フランス学）の研究に従事する。

こうした経歴によって、明治維新後、辻新次は新政府に登用され、開成学校教授試補、大学南校少助教、中助教、大助教と進み、明治五（一八七二）年には、校長に栄進した。⁴⁾

中川元にとって、辻新次は同郷の先輩、そうして専攻は同じくフランス学、さらに辻校長のもとでの南校生徒でもあった。とはいえ、中川元は、辻新次の眼からみると、忠実な生徒とはいいかねる行動もなしている。

明治五年五月、中川元は南校でフランス学を専攻してきた生徒の中から、司法省が設立する専門学校への転学運動がおこったとき、その一員となって、依願退学のうえ、行を共にした経歴を持っている。その原因を、中川元と同じ貢進生出身の加太邦憲（一八四九〜一九二九）による自伝『自歴譜』（一九三一年、一九八二年・岩波文庫）に求めると、南校での教育方針が英学中心となり、フランス学専攻生徒が前途に不安を感じたためであるらしい。

我々南校の仏正則第一級生は、凡そ三十余名のところ、その内十五名程は挙て転校を願出でたところ、学生監（九鬼隆一・浜尾新）はこれを喜ばず、留校を勧めて曰く、「南校においても早晚専門科を設くる見込なれば、当校に留まりて一同に専門学を修めよ」と。……残るにかかる漠然たる未来の専門科設立を期待して、長く便々たる能わざれば、この際許可せられたしと懇願したれども聴かれず、再三留校を勧説せらるるのみなれば、ここに至って我々は断然退校を届け放し、校舎を退去したり」と、『自歴譜』は書いている。⁵⁾

明治五年八月十七日付で、明法寮生徒に採用された中川元は、しかし学業半ばの状態で、明法寮を退学した。理由は明らかではないが、学業不振が原因ではなく、家計維持がそうさせたかと思われる。⁶⁾

中川元が五等教諭に補された当時の東京外国語学校の状況を知るためには、『文部省第三年報』収載の「東京外国語学校年報」が有効な手がかりを提供する。明治八年五月七日付で、学校長肥田昭作から文部大輔田中不二麻呂に提出された報告によると、東京英語学校の分離独立以前には、「其実ハ専門預備校ノ如キ者」であつた東京外国語学校は、「初テ語学校ノ名実共ニ行ハルヘキ機」をつかむに至つた。

ところが、その教育環境は最悪で、「位置学校ニ適セス其建築タルヤ卑矮古朽屢改補修繕ヲ以テ保持セシモノナレハ風雨ノ際或ハ壊頽セシコト測リガタシ」と評される老朽校舎に加えて、「書器等ノ備具未タ半ニ至ラス其欠乏ヨリ障碍ヲ興ス甚シ」き状況であつた。

学生は、仏語百三十六名、独語百七十九名、魯語七十九名、漢語二十九名と記録されており、対する教員は、一等教諭一名、二等教諭一名、三等教諭二名、四等教諭二名、五等教諭三名の計九名が正規の存在で、ほかに雇教員八名、外国教員十名が配されていた。それゆえ、中川元は正規教員の末席に位置づけられたわけである。日本人教員では、十四名が士族、三名が平民と記録されている。

以後、中川元が東京外国語学校に在職した明治十一（一八七八）年までの状況を、『文部省年報』から抽出してみよう。

『文部省第四年報』明治八年には、明治九年三月二十五日付で、学校長渡辺温が提出した「東京外国語学校年報」が収められている。前年の報告とは異つて、校舎の状況への言及はなく、代つて「試験ノ方法」が収められる。それによると、各級には日本人教員、外国人教員各一人が配置され、「該期中ニ教授セシ所ノ科業ヲ毎時一科ツ、分チテ之ヲ試験シ総試験終ルノ後各教諭会合シ各生試験ノ学力ト平常ノ学

力ヲ評シコレニ点評」するしくみであつた。この年には、教員二十三人との記事に加えて、外国教諭魯二人独五人仏五人米一人瑞一人清一人の在職が記録されている。

『文部省第五年報』明治九年、「文部省第六年報」明治十年、「文部省第七年報」明治十一年には、特記に値する記事は見当たらない。教員数だけをぬきだしてみると、明治九年には学校長のほか教員内国人二十八人、外国人独六人仏六人魯二人瑞一人清一人の在職が記録されている。これに対して、明治十年の記事では、学校長一人、訓導五人、助訓六人、其他教員二十九人、外国教員七人となり、中川元が幹部教員に位置づけられた事情が明らかになる。

明治十一年には、学校長一名、訓導助訓十一名、雇教員十五名、仏国人四名、独国人三名、魯国人二名、清国人一名であつた。

4

『東京外国語学校沿革』（一九三三年）には、明治七年三月現在の「東京外国語学校官員並生徒一覽」が収められている。学校長は辻新次、教諭は十一名だがほかに六名の教諭心得が在職する。外国人教師は二十名である。同年六月に中川元が就任する舎長はおかれていない。フランス語担当の教諭は今村有隣（二等）、大工原信吉（三等）の二名、興津良矩と甲斐謙之助が教諭心得であつた。フランス語担当の外国人教師は全て仏人で、マリエ、ビジョン、ブラン、フロイデンタレ一の四名と記録されている。

これに対して生徒名簿に眼を移すと、後年著名の人物が幾人も見出される。以下、級別にその氏名を列記してみよう。

英語学下等第一級 東京 岡倉角蔵

下等第三級 愛知 加藤高明

東京	妻木頼黄 ⁹⁾
小倉	末松謙澄
群馬	内村鑑三
英語学下等第五級甲	佐賀 天野爲之
下等第六級甲	岩手 田中館愛橋
下等第六級乙	静岡 石川千代松
下等第六級丁	東京 宮部金吾
仏語学下等第二級	福岡 寺尾 壽
下等第四級	静岡 野口保興
下等第五級	岡山 原田直二郎
独語学上等第六級	佐賀 飯盛挺三
下等第一級	鹿児島 木場貞長

これらの人物について、一人ずつその経歴を詳記する必要はない筈だし、岡倉覚三天心（一八六二〜一九一三）、内村鑑三（一八六一〜一九三〇）については、その存在を再記するにとどめたい。

加藤高明（一八六〇〜一九二六）は、明治・大正期の外交官・政治家で三菱会社、日本郵船を経て官界に入り、曲折を経ながらも、内閣総理大臣を二期勤めている。

末松謙澄（一八五五〜一九二〇）は、明治・大正期の政治家・法学者で伊藤博文の女婿でもあった。伊藤内閣にたびたび入閣した政治歴でも知られている。

一方、明治・大正期の学界で広く名を知られた人物も、右記の生徒中に含まれる。寺尾壽については後記にゆだねるが、天野爲之（一八五九〜一九三六）は、東京大学でフェノロサに経済学を学び、明治十五年（一八八二）年、東京専門学校（後の早稲田大学）の創立に参画し

ている。田中館愛橋（一八五六〜一九五二）は、長寿を保つ中で、物理学者として、さらに日本の学界代表として国際学会に活躍する存在であった。

石川千代松（一八六一〜一九三五）は、モースの指導をうけて動物学を収め、東京大学、帝国大学、東京帝国大学の教職を介して、長く指導力を発揮する。対する宮部金吾（一八六〇〜一九五一）は植物学者で、札幌農学校から北海道帝国大学にわたる長い教授歴を持っていた。

5

舎長としての中川元が監督した生徒たちの中には、中川元が後年、職務遂行に際して、かわりを持つ人物が複数存在する。最初の存在は、寺尾壽（一八五五〜一九二三）である。

明治十二（一八七八）年から同十六年まで国費でフランスに留学、帰国すると間もなく東京大学教授となった寺尾壽は、東京天文台の初代台長を勤め、日本天文学会会長でもあった。フランスでの留学先は、モンソーリ天文台で数学と天文学を収めた後にパリ大学に転じ、ここでも数学、天文学の業を積んでいる。こうした経歴のゆえに、寺尾壽は、数学史のうえにも不朽の名を残す存在であった。『日本の数学一〇〇年史』（一九八三年）は、水準の高い理論算術の教科書、中等教育算術教科書、上下（一八八八）を著わした。また、東京物理学校を作った中心人物の一人として鋭意学校の経営にあたった¹⁰⁾と評価している。

中川元と寺尾壽は、明治十八（一八八五）年一月二十六日付で、中学校師範学校教員検定試験委員になっている。前年八月十三日、文部省達第八号として、「中学校師範学校教員免許規程」が定められ、中

学師範学科若クハ大学科ノ卒業証書ヲ有セスシテ中学校師範学校ノ教員タラント欲スル者ニハ品行学力等検定ノ上文部省ヨリ免許状ヲ授与スルモノトスル措置にもとづく発令であつた。

第一回学力検定試験は、明治十八年三月に実施されたが、それに対応する試験委員任命の最初の人選に、中川元と寺尾壽が入っていたのである。⁽⁹⁾

寺尾壽の検定試験委員任命は、数学の出題に理論算術が多く課される結果を生みだしたと判断できる。『日本の数学一〇〇年史』は、その現象を、中等教員検定試験（いわゆる文検）などで、瑣末な整数論的問題が出題」ととらえている。⁽¹²⁾

理論算術重視の傾向は、明治十九（一八八六）年三月、文部省視学官となり、第二地方部（東北地方、北海道）担当となった中川元が、管内の中等学校での数学教育が低調であることを遺憾とし、講習会を仙台で開いたおりの方策にもあらわれる。

明治十九年十二月十二日から翌年一月二十日までわたる長期の講習会において、中川元が視学官の権限で委嘱した講師は、高等師範学校教諭で数学を担当する野口保興（一八六〇—一九四三）であつた。

野口保興は、前記のように、東京外国語学校仏語科生徒の出身で、中川元にとっては、直接の教え子であり、さらに「師範制度取調」の官命をうけてフランスに派遣されたおり、私費留学生としてフランスにおもむく野口保興が同船している。

『日本の数学一〇〇年史』は、『理論応用算数学』（一八九一）を著したが、これは非常によく売れた本であつたと、野口保興の活動を評する事実に注意したい。⁽¹³⁾

飯盛挺造の名は、野口保興の名と同様、一般的な人名事典にはあらわれない。けれども、中川元にとっては、この兩名は劇的なかわりをもつ人物であり、飯盛、野口の兩名は、明治四十三（一九一〇）年に、学校長高嶺秀夫の死去に伴う後任校長中川謙二郎が抜打的に解職した三人の教授に含まれていた。特に野口は、庶務会計幹事として、校内に威を張っていたのである。


飯盛挺造にとっては、解職処分を受けたのはこれで二度目であり、最初は明治二十五（一八九二）年七月、第四高等中学校教授を非職となつている。当事者の学校長は、前年十一月に文部省視学官から転じた中川元であつた。

飯盛挺造の非職処分は、「四高騒動」と俗称される学校内での権力斗争となんらかのかわりあるかと思われる。「四高騒動」については、筆者が「第四高等中学校長中川元—金沢時代の狩野亭吉をめぐって」と題する論説を書いたから、本稿では再論しない。ただ、「四高騒動」の下地をつくり、辞職した初代校長柏田盛文の退任後、第二代校長として着任する中川元を出迎えた学校長代理が、飯盛挺造であつた事実だけは、改めて指摘しておこう。

飯盛挺造は、東京大学理学部で物理学を収めた後、ドイツのフライブルク大学に留学する。往航に際して、衛生学修業を命じられてドイツにおもむく森林太郎鷗外とフランス郵船所属のAヴァア号に同船し、『航西日乗』に名をとどめる事実にも注意したい。

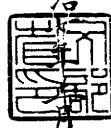
第四高等中学校非職後、飯盛挺造は、女子高等師範学校教授の地位を得たのだが、それを解職した校長が偶然とはいえ、同じ中川姓の人物であつたのには驚かされる。中川謙二郎は、仙台高等工業学校長から女子高等師範学校長になつたのだが、その人事と連動して、仙台高等工業学校長になつたのが、第二高等学校長から転出した中川元とい

中川元
補文部省一等出仕
文部大臣從四位長次奉
明治七年六月廿二日




文部省差在中川元
東京外國語學校
出勤可致事
明治七年六月廿二日
文部省

文部省差在中川元
任五等教諭
文部省差出仕從四位隆奉
明治七年六月廿二日



中川元
東京外國語學校訓導主任
一ノ年金六百圓交付候事
文部大臣輔從四位田中不二麻呂
明治七年六月廿七日



うのも、不思議な因縁といふべきだろう。

7

中川元が、東京外国語学校に勤務中、最も数奇なかかわりを持ったであろう人物は、ロシア人アナキストとしてのレフ・イリイチ・メーチニコフ (Metchnikoff, 1838~1888) をおいて他に例をみいだせない。一般的な人名事典に登場する「メーチニコフ」は、ロシア生まれだが、フランスの動物学者・細菌学者となるイリヤ・メーチニコフ (パスツール研究所教授、ノーベル生理・医学賞受賞者) であるけれども、レフ・イリイチ・メーチニコフは、その七才上の兄と記録されている。

レフ・イリイチ・メーチニコフは、ナロードニキとよばれる場合が多い十九世紀後半のロシア革命家の一人である。奔放な少年だったというメーチニコフは、大学に入ってから学生運動に積極的に加わり、複数の大学を放校処分されたと伝えられる。¹⁴

ついに二十か国語に近い言語に通じたというメーチニコフは、早くも一八五九年に、パレスチナ派遣の政府代表団で通訳の地位を得たけれども、上司と衝突し、以後は海外放浪をくり返す結果となった。

一八六〇年、ベネツィアに渡り、イタリア統一戦争に参加して、重傷した。このとき、メーチニコフは、片足を失っている。ナロードニキとしての経歴は、フイレンツェに移ってからロシアの革命思想家であるアレクサンドル・ゲルツェンとめぐり会って以来のものと判断されている。

国際革命家メーチニコフが、東京外国語学校魯語科のお雇い外国人教師となるきっかけは、一八七二(明治五)年、ジュネーブで大山巖にめぐり会ったことに由来する。大山巖(一八四二~一九一六)につ

いては、詳細は不要だろう。後の公爵、陸軍元師、日露戦争当時の満州軍総司令官である。

日本研究を思いたち、日本語習得を志したメーチニコフは、思いがけず、大山巖にめぐり会う。フランス語を全く話し得なかったという大山とフランス語と日本語の相互教授を約したメーチニコフは、やがてその手づるで、岩倉使節団との接触を得、ついには日本渡航を要請されるまでになった。

東京で薩摩藩関係者によって組織される予定の私立学校が、メーチニコフの職場であった筈なのに、彼の到着前に計画は無期延期となり全く思いがけない職場としての東京外国語学校が登場したのである。そのてんまつを、メーチニコフは、「わたしはいつのまにか、日本の聖なるミカド陛下に仕える役人になってしまったのであった。ちょうどモリエール喜劇のジュールダン氏が、そのなんたるかさえ知らずに作家になってしまったように……」と記している。

8

レフ・イリイチ・メーチニコフは、フランス郵船ボルガ号の船客として、横浜に到着した。前便のニール(ナイル)号が、三月末に伊豆半島南端で座礁沈没していること、当時のフランス郵船ホンコンー横浜航路が、月二便の体制であった事情からみて、来日は明治七(一八七四)年四月とみるべきだろう。それゆえ、メーチニコフは、中川元より僅かに早く東京外国語学校に職を得たわけである。

メーチニコフは、貧血症が原因となって滞日不能となり、翌年末にはヨーロッパに帰るのだが、東京外国語学校での在職体験は、「日本におけるヨーロッパ式教育」と題して、一八八五年四月十二日付「ロシア報知」(ルースキエ・ヴェードモスチ)に発表されている。¹⁵

メーチニコフは、東京外国語学校では魯語科のお雇い外国人教師であった。一方、中川元は仏語科教師を明治七年十一月以降勤めることになる。両者の間に、この間、直接的な交渉があったと判断できる資料はなにも見当たらない。中川元が「口頭教授法」によってフランス語を習得した事実に加えて、メーチニコフがフランス語に巧みであった事実にもとづいて、両者が交流したのではないかと推察するだけである。

とはいえ、明治十一（一八七八）年に至って、中川元が、日本国家の興隆は、民衆の政治意識向上によってこそなしとげられるとの意見を、松方正義に上申する事実と、メーチニコフが民衆（ナロード）こそ社会改革の眞の主体と把握する革命家であった事実が、全く無関係なことがらとも思えない。

ところで、明治十一（一八七八）年一月、文部四等属に任じられた中川元は、「師範制度取調」のため、フランスに派遣となった。と同時に、「文部大書記官九鬼隆一佛国派遣教育事務調理之際輔手ヲ要スルノ節ハ其ノ意ヲ領シ同人ノ指示ヲ受クヘク候条此旨相達候事」との命令が、文部大輔田中不二麻呂から発せられていた。

九鬼隆一のフランス派遣は、この年にフランスの首都パリを会場にして開催が予定されている万国博覧会に参加し、各国の教育事情にかかわる情報を収集する目的にもとづくと推察される。そうした事情と関係するためか、中川元の日本出発は、パリ万国博覧会に対する日本代表団と同行し、通訳業務を依頼される厄介なものになった。

手島精一の回想によると、一行の行く先はフランスであるから、誰かフランス語の出来るものが必要であると思つて居た矢先、丁度同君は師範教育視察のため欧州留学を命じられたので、交渉の末、同君もこの一行に加はり、その事務を終へて留学するといふことで同船、

したのである。⁽¹⁷⁾

9

パリ万国博覧会に派遣される日本政府代表団の団長は、後の侯爵松方正義（一八三五—一九二四）であった。政府内での松方正義の地位は、法国巴黎府万国大博覧会派出総裁と称されていたらしい。

パリ万国博で眼にし、耳にしえた成果を、富国強兵・殖産興業の国策に反映させようとの決意は、代表団に属した誰れしもが、等しく抱いたものであつたろう。そうした状況の中で、囑託通訳としての中川元は、松方正義あてに上申書をだしている。

半紙三枚にわたり、約二千字に達する意見書が、嗚呼、我邦ヲ富且強ニナスノ萌芽蓋シ茲ニ基ツク所甚多ナラント激歎踊舞ノ至リニ堪ヘス、と書きだす点が、万国博覧会から撰取する知識、技能への期待をうかがわせる。けれども、それが実を發揮するためには、日本の国情を改変させる必要があると、中川元は説いている。

当時の日本は、政府ハ生父母ニシテ人民ハ生子ノ如ク恰モ政府アリテ人民生ヲ聯ニスル景況ニ異ナラス、と見定めなくてはならぬ政府主導型国家であると、中川元は認識する。しかし、文明開化の実をあげ、富国強兵を達成するためには、発想を新にしなくてはならないと、中川元は説いている。万国博覧会に成果を誇示する列強は、人民アリテ国家興リ国家アリテ政府アリ人民知能ニシテ国家開化ヲ到シ人民力アリテ国力アリ人民富シテ国富、んだのであるから、日本でも発想を逆にすべきであるとも進言した。そうして、国家ノ事唯行政ノ方点ニノミ進ミ其都合ヲ計ル、のが、政府の責務と論じたわけである。

いささか若気の到りとも思えるこの上申書に、藩閥政府のエリートがどう対応したかは判らない。中川元の遺品の中に、松方正義がパリ

の写真館で写した肖像があり、裏面に「中川君 松方」の署名がある
事実は、民権主体的発想を許容していた証と受けとめておこう。

ところで、九鬼隆一と一年近くもパリに同居した中川元は、この間にレフ・イリイチ・メーチニコフと交流を持ったと判断できる。そのことは、後に大著『日本帝国』L'Empire du Japon (一八八一年)を書き上げたメーチニコフが、日本研究の上できわめて貴重な幾冊もの書籍を届けてくれた文部省第一次官(文部大丞)、国家会議(左院)員、パリ万国博覧会特別代表の九鬼隆一氏の御好意に感謝の意を述べたい⁽¹⁹⁾と記す事実を照して明らかになる。

東京外国語学校在勤時のよしみによって、メーチニコフが中川元とパリでも接触し、上司である九鬼隆一にひきあわせられたか、或は九鬼隆一に接近したメーチニコフが、後年、九鬼自身によって秘書官同様に使役したとされる中川元に出会ったのか、判断できる材料はなにも残ってはいない。前記した上申書は、その背後にメーチニコフの影を、思わせると、あえて書いておこう。

10

東京外国語学校で教鞭をとっていた当時の中川元が残した業績の中で、後世に確たる証拠を残す存在は、ほん訳修身教科書『修身鑑』全七巻である。

筆者がこの書物の存在を具体的に知り得た最初は、長野県松本市に位置する教育史博物館旧開智学校の所蔵図書閲覧を介してであった。

「学制」期に開校し、開智学校と呼称された小学校は、当時存在した筑摩県を中心的存在であり、開成学校(東京大学の前身のひとつ)の校舎に範をとった擬洋風の校舎は、重要文化財に指定されている。開智学校を継承し、今日では松本市立開智小学校となっている教育

施設は、百年をこえる歴史の中で、秀れた実践をつみ上げてきたばかりでなく、各種の資料を保存し、整理をなしてきた。

ほん訳教科書『修身鑑』は、開智小学校の改築に際して、不要となる擬洋風建築を移築のうえ発足した「旧開智学校」に移管された歴史資料のひとつである。その所在は、「旧開智学校」収蔵品目録の閲覧を介して、筆者の知り得るところとなった。

この教科書が、開智学校での授業に用いられたものであるかどうかは判らないが、実践の参考資料になったと考えることは妥当だろう。

現物を手にすると、『修身鑑』は、全七冊の和とじ本である。巻一から巻七まで、全ての表紙に、文学博士中村正直、中川元訳述、中島雄校正の文字が記される。筆者の所蔵本は、巻七の末尾に、明治十一年出版、高等師範学校御払下 定価金壹円四拾銭と記した後、発売者辻敬之、発売所普及舎(東京市神田区柳原河岸十四号地)の文字がある。普及舎は、明治十年代後半から二十年代前半にかけて、新教育の要となる開発主義のメッカ視された存在である事実に注意したい。

ところで和紙、袋とじの本文は、どの帖にも「東京女子師範学校」の文字が入っている。校閲者の中村正直が、『西国立志篇』の著述で知られ、東京女子師範学校校長でもあった事実を考えると、『修身鑑』は当初、東京女子師範学校が教科書と想定して刊行し、明治十九(一八八六)年に高等師範学校女子部に改組されてからも、継承された存在とみることができらるだろう。

全国規模での使用状況について、筆者はなにも知り得ない。しかし初刷刊行後、十年近くたっても増刷をなし得たのだから、中川元による訳述が、無益の業でなかったことは確かかと思われる。

11

『修身鑑』卷一は、巻頭に「原序」を収めている。そうして、此書ハ、小学ニ於テ、年少ノ課業書ト為シガ為ニ編セリ、の文を発見するわけである。ついで訳述者による「修身鑑例言四則」が存在するために、原著者は、法蘭西人テ、アシユ、バルロオー、原書名は、モラル、プラチック、と判り、次に、即チ修身言行録ナリ、の注記がなされている。

全七巻は三篇に大別され、篇中に複数の款をおくが、目録（目次）から抜萃すると、左のとおりである。

第一篇（卷一）

第一款 道徳ヲ論ズ

第二款 内外両部ノ教法ヲ論ズ

第三款 宗教ヲ守テ死ニ就ク者ヲ論ズ

第二篇之上（卷二）

第一款 心ヲ格シ意ヲ誠ニスルヲ論ズ

第二款 質実ヲ論ズ

第三款 節望ト無慾ヲ論ズ

第四款 質素ト節食ヲ論ズ

第五款 忍耐ヲ論ズ

第二篇之下（卷三）

第一款 堅忍耐難ヲ論ズ

第二款 勇氣ヲ論ズ

第三款 固執ヲ論ズ

第四款 勞作勉勵及ビ用時ノ方ヲ論ズ

第五款 戒虞ト智巧ヲ論ズ

第六款 慎言沈黙ヲ論ズ

第七款 順序儉約及ビ先見ヲ論ズ

第三篇之一（卷四）

第一款 正理ヲ論ズ

第二款 正潔ヲ論ズ

第三款 信義ヲ論ズ

第四款 誠実ヲ論ズ

第五款 報恩ヲ論ズ

第六款 善心ト寛宥ヲ論ズ

第三篇之二（卷五）

第一款 仁恵ト善行ヲ論ズ

第二款 仁義ヲ論ズ

第三篇之三（卷六）

第一款 豪俠ヲ論ズ

第二款 本国ニ対スル義務ヲ論ズ

第三篇之四（卷七）

第一款之一 父母ノ義務ヲ論ズ

第一款之二 人子ノ義務ヲ論ズ

第一款之三 夫婦ノ義務ヲ論ズ

第一款之四 兄弟姉妹ノ義務ヲ論ズ

第一款之五 主従ノ義務ヲ論ズ

第二款之一 官吏ノ義務ヲ論ズ

第二款之二 教徒ノ義務ヲ論ズ

第二款之三 陸軍士官ノ義務ヲ論ズ

第二款之四 海軍士官ノ義務ヲ論ズ

第二款之五 諸職ノ義務ヲ論ズ

第二款之六 教育ヲ論ズ

第三款之一 待遇ヲ論ズ

第三款之二 礼恭ヲ論ズ

第三款之三 友誼ヲ論ズ

各篇各款には、具体的事例が数多く示されるが、登場する人物は、原著者がフランス人であるためか、全てヨーロッパの歴史にかかわる存在で、有名無名を問わず、適例を求めたものであるらしい。キリスト教的道徳から生じる制約は稀薄のようにみてとれる。そのことが、具体的事例を多く収載した事実とあいまって、教科書として、ある程度の需要に応じた理由になるのだろう。

中川元の訳述書を『修身鑑』と名付けたのは、青年時代の一時期をともに飯田藩藩校の教官末席としての「句読」で過した柳田直平であった。⁽²⁾柳田直平は、日本民俗学の開祖柳田国男の岳父である。

注

- (1) 東京師範学校で「訓導」を「教諭」に改めたのは、明治十四(一八八二)年六月と記される。「教諭」から「訓導」となったのは、明治十年八月で、東京外国語学校での事例と同時点である。
- (2) 第九十七章は、明治六(一八七三)年四月二十八日付の文部省布達第五十七号に含まれる。
- (3) 以下、この節の記述は、東京外国語学校『東京外国語学校沿革』(一九三二)年に準拠した。
- (4) 唐沢富太郎『図説教育人物事典』下(一九八四年・ぎょうせい)五六五～五六九ページ。
- (5) 加太邦憲『自歴譜』(一九八二年・岩波文庫)一〇二ページ。
- (6) 廃藩置県以前に、中川元(当時は孫一郎)は父の雄之助逸山から家督を受けついでいる。父の退隱は、戊辰戦争参加当時の戦傷による歩行困難に

もとづく⁽³⁾と伝えられる。

- (7) 東京英語学校分離以前、生徒の寄宿舎として用いたものの改装であったと称される。
- (8) 岡倉覚三が正しい筈である。
- (9) 妻木頼黄(一八五九～一九一六) 旗本出身であり、渡米して苦学。コネル大学で建築学を学んだ。明治十年代末に計画された中央官庁街建設に際し、お雇い外国人ベックマン Wilhelm Böckmann について技術を習得している。臨時建築局御用掛を経て大蔵省に入り、官庁官繕の元締として大きな影響力を振っている。この項は、村松貞次郎『お雇い外国人』15 建築・土木(一九七六年・鹿島出版会)を参照した。
- (10) 『日本の数学一〇〇年史』編集委員会編『日本の数学一〇〇年史』上(一九八三年・岩波書店)一四一ページ。
- (11) 『官報』明治十八年一月二十六日(辞令)。
- (12) 『日本の数学一〇〇年史』上 一四一ページ。
- (13) 同右二〇八ページ。
- (14) メーチニコフ(渡辺雅司訳)『回想の明治維新—ロシア人革命家の手記』(一九八七年・岩波文庫)三二〇ページ。以後、メーチニコフに関する記述は、前記の訳書に従った。
- (15) 沢護『フランス郵船』(『横浜ふらんす物語』一九七七年・収載)一三八ページ。
- (16) 訳文は、『回想の明治維新』に「東京外国語学校の思い出」と題して収められている。
- (17) 塚原嘉藤編『中川元先生記念録』(一九一八年・故中川先生頌徳謝恩記念資金会)五十八ページ。
- (18) 同右二二二ページ。
- (19) 『回想の明治維新』三四一ページ。

茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学、芸術）三十七号（一九八八）

(20) 開智学校蔵書を閲覧後、東京・神田の古書会館で定期的に開かれる古書
即売展で購入した。

(21) 『中川元先生記念録』五十三ページ。

（茨城大学教育学部社会科）

（一九八七年九月十二日受理）